

毎日新聞 2017年3月23日



大阪・鶴橋を憂いを帯びた表情で歩く金時鐘さん。「平和が続けばええがなあ」

＝大西岳彦撮影

どうなっているのか？ そしてどうなるのか？ 海ひとつ隔った隣国の先が見通せない。朝鮮半島の北も南も祖国でありながら、愛憎半ばする思いで見つめる在日の詩人、金時鐘（キムシジョン）さんに会った。【鈴木琢磨】

### 金正男氏殺害「恥ずかしいて…」「やっぱり話し合わなあかんよ」

「恥ずかしいてなあ、ホンマ、恥ずかしいてなあ」。ここは大阪・鶴橋、チヂミを焼くゴマ油とキムチのおう路地を歩き、88歳になる詩人がしきりにわびる。北朝鮮の金正恩（キムジョンウン）朝鮮労働党委員長の異母兄、正男（ジョンナム）氏がマレーシアで猛毒VXによって殺害された事件のことだ。真相は謎だらけながら、北朝鮮の国家ぐるみの犯罪ではないかと、国際社会から疑念の目で見られている。「仰天するより、あきれかえって、恥ずかしいてしょうがないんや」

ずっと背筋を伸ばして歩く時鐘さんの姿にキムチ売りのおばちゃんは「あっ、詩人の先生や」と人なつこい。私にとっても時鐘さんは奥さんが切り盛りしていた近くの居酒屋でどこか申し訳なさそうな顔をして飲んでいたおっちゃん。だが、その顔のしわには苛烈な南北分断史が刻まれている。ふらっと昔ながらの焼き肉屋に入った。玄関先で流れていた桑田佳祐さんの歌う「LOVE KOREA」に吸い込まれるように一。

日本植民地下の朝鮮・済州島で育った時鐘さんは典型的な皇国少年だった。日本の敗戦による解放で初めて朝鮮人として目覚め、南朝鮮労働党（南労党）の末端の党員として活動する。アメリカの統治政策にあらがひ、南北分断に反対する武装蜂起「済州島4・3事件」（1948年）にかかわるものの、弾圧が激しく、密航船で脱出する。たどりついたのが同胞密集地の鶴橋だった。まだ20歳そこそこである。「あてもなくふらついてな。道ばたに放置されていたトラックの運転席で眠りこけてしまったわ」。いろいろな運命のつながりがあってこの地で詩を書く。50年には朝鮮戦争が勃発する。

スキャンダラスな正男氏殺害事件について、失礼を承知で、朝鮮王朝そのものじゃないですか、と言ったら、悲しそうな顔をした。「反論できんわ。李朝中期から党派争いに明け暮れ、王権をどの派が握るかの争いばかりやとったからなあ。あんな小さい小さい国で」。そして続けた。「（正恩氏の叔父で朝鮮労働党行政部長だった）張成沢（チャンソンテク）が粛清されたやろ。ものすごく驚いたけど、ああ、正男も危ないなとずっと思っていたんや。正男が本国を離れていたのも何か任務があったはずや。その正男の生活の面倒を見ていたのが張成沢だったから。ただ現実になるとはな……」

懐かしの味なのか、ゆっくり済州島のマッコリを飲みながら語る詩人は自ら口にした「粛清」の2文字に

立ちすくんだ。「朴憲永（パクホンヨン）を思い出す。南労党の書記長で、救世主のようにあがめて僕も入党したから。朝鮮労働党が成立すると、金日成（キムイルソン）に次ぐナンバー2にまでなった人物ですよ。その彼が朝鮮戦争の休戦協定締結（53年7月）を前にして金日成政権によって逮捕され、見せしめ的な裁判の末に処刑されたんや。党を私物化し、反党的行為をおこなったかどで。そしてお決まりのスパイや。私には驚天動地でね。正義の国と信じていた北朝鮮への愛も、金日成首領さまへの尊敬も、懐疑の闇に放り込まれました」

もうひとり、詩人の名もあげた。林和（リムファ）である。才能ある文学者だった彼もまた南労党派として粛清された。「林和の裁判記録を読みましたよ。バカバカしくて漫画にもならん。それこそぬれぎぬというやつや。死刑宣告され、何か言い残すことはないか、と裁判官に問われ、ない、と首を横にふつたらしいんや。翌日、処刑です。ひと晩、林和がどう過ごしたのか。僕はもう年を取るだけ取って高ぶる感情も枯れてはきたけど、林和の無念を思うといまでも胸が痛くなるわ」

理不尽な仕打ちは北の祖国だけではない。日本にいる表現者さえ指導者の神格化を進める祖国への忍従を迫られる。歯に衣（きぬ）着せぬ時鐘さんの言動は、北朝鮮を支持する在日組織から「民族虚無主義者」とレッテルを貼られ、批判にさらされる。夜な夜な詩人は安酒をあび、じっと足元を見つめ、悩み抜き、そして生涯向き合うテーマ「在日を生きる」が現れる。代表作「猪飼野詩集」にこんな詩がある。

<地図になく 地図にないから 日本でなく 日本でないから 消えててもよく どうでもいいから 気ままなものよ。>（「見えない町」）

北だけではない、強圧的な韓国の朴正熙（パクチョンヒ）軍事政権とも相いれぬ時鐘さんは、分断祖国のはざまであえいでいた。

「98年、金大中（キムデジュン）さんが大統領になってようやく光がさした。南の祖国・済州島を訪問できたんです。月よりも遠かった父と母の墓に不肖の子はぬかずいた。軍事政権下での民主化闘争は30年近く続き、どれだけ多くの学生の人生がおじゃんになったかわからん。その犠牲があつての幸せです。年に1～2度の墓参りは続けたく、韓国籍も取りました。南北統一を願って朝鮮籍にとどまる在日同胞を否定するのではなく、あくまで総称としての<朝鮮>にこだわりながらも、国籍を韓国にしたわけです」

その南の地もまた揺れに揺れている。友人の国政介入などで大統領罷免が決まった朴槿恵（パククネ）さんの、そもそもの悲劇は在日青年の銃弾によって母が殺されたことにある。「あの犯人もここ鶴橋かいわいにいたんやな。母を亡くし、そして側近に父まで殺され、内向的にならざるを得なくなり、シンバン（みこ）みたいな人間についつい心を開いたんやろうな」。ソウルの大規模ろうそく集会でもらった<朴槿恵退陣>と刷られた紙コップをお見せした。「誇らしい気持ちだ。彼女には同情もするけど、これで朴正熙時代が本当に終わるんやと思う」

そういえば、正恩氏を産んだ高英姫（コヨンヒ）さんも鶴橋の生まれである。わが息子を金王朝の3代目に就かせたが、その晴れ姿を見ることなく世を去った。「因縁めくわ」。詩人はぽつんと言い、マッコリを飲み干した。「在日のカオスがすべての起点になっているのかもしれない。この地図にない町が……」。隣国は

ざわざわと落ち着かない。そして、わが日本はといえば、時代錯誤の「教育勅語」がニュースである。「アハハ、皇国少年だった僕も覚えましたよ」

あらゆる波乱も平和へのうねりならいいが、そうでない気がする。米国のトランプ政権の動きも読めない。「異論かもしれないが、北が核・ミサイルを開発するのは自分の家のそばで米韓が軍事演習をするからでもある。ハリネズミになって身構えざるをえない。好き嫌いやない。やっぱり話し合わなアカンよ。戦争になったらおしまいや」

5月に人生で初めて韓国大統領選の1票を投じる。「平和を願うわ。在日は共存の知恵、経験はあるんやから」

希望はまだ捨てられないということかー。今夜は久しぶりに時鐘さんの詩集を開こう。

#### ■人物略歴

キム・シジョン

1929年、釜山生まれ。53年に詩誌「ヂンダレ」を創刊。主な詩集に「新潟」「猪飼野詩集」など。エッセー集『「在日」のはざままで』で毎日出版文化賞、回想録「朝鮮と日本に生きる――濟州島から猪飼野へ」で大佛次郎賞。